

III 紹 介 III

谷岡一郎 『「社会調査」のウソ』

澤 喜 司 郎

(I)

世の中のいわゆる「社会調査」の過半数はゴミであると言い切る著者は、本書の冒頭で「この本は少々過激な内容である。多くの社会調査が実名で批判されており、その数は50以上にのぼる。ちなみに実名で批判した人々には、反論があればお答えすることを約束する。そして筆者に非があれば謝罪する。…もう一度お断りしておくが、過激な内容につき、ずさんな調査(すなわち「ゴミ」)をまき散らしている人々のうち、血圧の高い人は読まない方が無難である」と断っている。

著者が過激な内容という本書の構成は、

- 序 章 豊かさ指標はなぜ失敗したか
- 第1章 「社会調査」はゴミがいっぱい
- 第2章 調査とマスコミ—ずさんなデータが記事になる理由
- 第3章 研究者と調査
- 第4章 さまざまな「バイアス(偏向)」
- 第5章 リサーチ・リテラシーのすすめ

であり、第1章では誰が社会調査という名のゴミをまき散らしているのかという問題が取り上げられ、第2章と第3章では特に社会に大きな影響を与えるマスコミと学者(研究者)はなぜゴミをまき散らすのかが述べられ、第4章では将来のゴミを作らないためにリサーチの各プロセスにおける「過ち」について解説され、第5章ではゴミを見分ける方法として「リサーチ・リテラシー」の必要性が説かれている。

以下、本稿では本書の内容を簡単に紹介したい。

(II)

著者は、社会調査という名のゴミが氾濫し、そのゴミは新たなゴミを生み出し、大きなうねりとなって腐臭を発し、社会を、民衆を惑わし続けていると警鐘し、「社会調査を研究してきた者として言わせてもらえば、社会調査の過半数は『ゴミ』である。

それらのゴミは、様々な理由から生みだされる。自分の立場を補強したり弁護するため、政治的な立場を強めるため、センセーショナルな発見をしたかのように見せかけるため、単に何もしなかったことを隠すため、次期の研究費や予算を獲得するため等々の理由がある。…それを無知蒙昧なマスメディアが世の中に広めてゆく」という。

そして、誰が社会調査という名のゴミをまき散らしているのかについては、「まず一番多く社会調査を計画・実施しているのは、筆者自身も含まれる『学者』と、その予備軍とされる大学院レベルの研究者たちで」、「より困った問題は、大学院レベルが自分の論文を補強するために安易に集めるデータである」とし、「学者のヘンな調査が横行するのは、それをちやほやする受け手（マスコミ、民衆、役所など）がいるからである。日本には、ちょっとでも社会的に事件性があると何のチェックもなく記事になり、将来の研究費が（文部省はじめ関連省庁より）予算化され、その学者は大先生とあがめたてまつられるという風習がある」と批判している。

次に、学者よりは少ないとはいえ、かなりの数の社会調査が政府や政府関連下部組織、特に官公庁でなされ、これらの調査は「お金をかけたわりに、おそまつなものが多い」とし、このようなヘンな調査が生まれる理由として、①動機自体は悪くない「単なる思慮不足」、②外部の不満の声に対する「弁明的なごまかし」、③将来の予算を獲得するための「政策的サポート」をあげたのち、「学者よりも、お役人よりも、もっと調査方法論がわかっていない、もしくはわかった上でわざと悪用している一部の社会運動グループが存在する」としている。

学者（および学者予備軍）、政府・官公庁、社会運動グループとともにマスコミもゴミを出すとし、「誰がどんな調査を行おうと、通常はマスコミに取り上げられなければ、広く一般的に知られることはない。その意味で、マスコミはゴミがゴールに入るのを防ぐキーパー役をしてもらわなければならない。ところがマスコミには、自分たちが行う調査を含め、その内容や方法論をきちんとチェックしている様子が見られない。それどころか、とんでもない調査を、発表されるままに記事にしたり、場合によっては故意に悪用することを繰り返している。…どこでどう思考能力が停止してしまったのか、最近是比较的良識的といわれていた新聞でも、官公庁や研究者の発表する調査結果や分析を、ほとんどそのまま、チェックせずに記事にしているようにみえる。それがセンセーショナルな内容や数字であれば、まさにゴミのたれ流しになってしまう」し、他方で「調査というのは、新聞社ないしは記者の代弁をしてくれるがゆえに記事になることもあるし、逆に、あの新聞社なら記事にしてくれそうだと考えて、ヨタ調査を持ち込むこともあるだろう。記事に取り上げてもらうには、トピックスのお

もしろさ(特に時事ネタ)、特定の思想に賛同してくれそうな新聞社を選ぶ、センセーショナルな発見のふりをする、などいろいろある」という。

(Ⅲ)

学者・研究者はなぜゴミをまき散らすのかを述べるに際して、著者は「国立大や有名私立大学の教授(大御所)で、特に大きな学界の会長などを務めたことのある方々(の多く)は、血圧が上昇する可能性もあるので気をつけられたい。ただし、若い学者層には必ず読んでもらいたい」と前置きしたのち、『大学の先生』というステイタスは大変高い。もちろん『大学の先生』といっても、ピンからキリまであるのは他の多くの職業と同じで、中にはかなり世の中に不適應な者や、どう考えても頭の出来がよくない者が混じっている。はた迷惑なのは、たまにヘンな奴がいて、常識から大きくズレた思想や意見を述べることがあるが、それがいかかわしい宗教団体やマスコミの主張に取り上げられ、いかにも学者全体の意見であるかのように喧伝されることである。なまじステイタスが高いため、不出来な構成員の利用価値まで高くなるという、不思議で逆説的な世界なのである」と、現代日本の学者世界を評している。

そして、「とんでもない『ゴミ』が発生するのは…方法論的な知識を踏まえていない調査が多いからである。大学や研究機関の学者たちであれば、こうした方法論ぐらい当然、理解しているだろうと思われるかもしれないが、実は相当あやふやな人もいるのである。中には、若い頃に受けた教育カリキュラムに問題があったため、無知なまま学者になってしまったという気の毒な者もいるが、許せないのは、方法論を知っていながら(故意に)してはならないことをする学者たち」であり、さらに学者が知らず知らず(善意で)犯す間違いも多く、それは「ある結論を証明したいという『思い込み』によるもので…自説の正しさを信じるあまり、ある方法論的なプロセスを(知らずに)省略したり、他の重要な要素を抜かしてしまうことから起こる間違いで、筆者を含め、ほとんどの学者が経験する過ちである」という。

このような善意で犯す間違い、つまり操作は「後づけ理論」と呼ばれ、それは帰納的な論理構成を持つもので、「データに合わせて、事後に理論が作られたり、因果関係を仮定したりする行為のことである。データをこねくりまわしているうちに意外な相関関係が見つかり、それをそのまま論文に書いたりする行為で、社会科学方法論的には正しい検証手順ではない」。これに対して、理論と仮説と検証プロセスがあらかじめ論理的に決められていて、それに従って検証することを演繹的な論理構成と呼び、自然科学と同じように社会科学でも「事前にきちんと理論と仮説と検証プロセスがあっ

て、そのとおりのプロセスで検証された結果を見なければならない」ばかりか、「自然科学では理論どおりの検証結果が得られることが多いが、社会科学の場合は必ずしもそうとは限らない。社会科学は様々な一過性の邪魔が入りやすい『社会』を対象とするため、その検証には、より高度な論理構成が『アプリオリ』にできていなくてはならない」のである。

とはいえ「データをこねくりまわして、そこから何らかの関係を見出そうとするのは決して無意味なことではない。『なぜ』を考えることは、次の仮説につながるからである。理論というのは、自然科学でも社会科学でも、えてして経験的な因果関係によって作られることが多い。その意味では、帰納的であり、アポステリオリなものだともいえる。ただし、それを論文という形で検証するには、経験的に得られた理論(と仮説)をスタートラインにして、それに即したデータを集め、アプリオリに決められたやり方で検証する必要がある」り、また「意図した結論が出ないからといって、論文にならないということはない。というよりも、特定の理論と仮説に従ってアプリオリな計画で検証をスタートさせたのであれば、意図せざる結果も論文に含めるべきである。なぜなら、一定の論理構成に従ってそうなるはずの結果が出なかったという事実自体が、学問の進歩に寄与できるからである」。しかし、社会科学では「理論は正しくなくても一定の結果が出ることもある。社会科学というのは、自然科学以上にアプリオリな計画を持っていなければ、何でも証明できてしまうという危険性を孕んでいるのである。そして実際、都合の良いデータと後づけ理論で、本当は正しくないことまで理論として通用してしまっている」と指摘している。

(IV)

著者は「社会調査が増え、それも玉石混交ということになってくると、それらのリサーチが本物であるかどうか見極める能力が必要になってくる。本書の主眼はまさにそこにある」とし、リサーチ・リテラシーを提唱している。

なぜリサーチ・リテラシー教育が必要なのかについて、「人々のリサーチに対する無知につけ込み、ゴミ情報を流す者、それを広める者、それを利用する者たちが、あまりに多いからである。これらの者に対抗できる能力を持たない限り、今の、そしてこれからの社会では、損ばかり重ねる不幸な人間を生み出すだけである。現在のコンピュータの処理能力は、とてつもないレベルにまで達している。かつては1年以上かけて計算していたある種の多変量解析も、今では瞬時に処理を終えてしまうばかりか、ご丁寧にも間違いの可能性のある箇所まで教えてくれる。…しかし、この便利さ

が落とし穴となることもある」とし、「逆説的ではあるが、機器の分析能力が便利になればなるほど、それを扱う人間の能力には一定以上のレベルの、目的、知識、倫理観、そして哲学が要求されるようになる。確かに今の機器は便利すぎるほど便利で、誰でも簡単に、何でもできてしまう」と危惧している。

そのため、リサーチ・リテラシー教育は「できればコンピュータの本格的な知識と並行して学ぶのが望ましい。ただし、多くの概念には統計学という前提が存在するため、中学ないし高校から統計学を教えることが求められる。その場合、統計学の知識は概念的なものでよく、小学生高学年か中学生レベルで修得可能なもので十分であろう。ともすれば統計学は退屈で難解なもののような印象があるが、ことさら難しくしているから難しく感じるだけでのことで、教え方次第では楽しい学問になりうるはずである」という。

また「情報機器やシステムの進んだ現代では、他人より、より多くの情報を集めることを競っても意味がない。情報など、集めようと思えばいくらでも集められるからである。むしろ今後、必要となるのは、あふれるデータの中から真に必要なものをかき分ける能力、いわゆる『セレンディピティ』と呼ばれる能力であろう。このセレンディピティを訓練するにあたっては、まずゴミを仕分けることが効果的である。つまりデータをどう『捨てる』かである。データや社会調査の情報はだいたい3つに分類される。役に立つ有益なもの、目下のところは役に立たないが将来的に必要となりそうなもの、そして『ゴミ』の3つである。数量的にはこの最後の『ゴミ』が圧倒的に多いが、この『ゴミ』をすぐに捨てることのできる人は、そうでない人より、かなり有利なポジションを占めることになるだろう。この能力がリサーチ・リテラシーのある人となない人の差となる。もう一度、繰り返すが、今後は情報を得る能力よりも捨てる能力の方が、はるかに重要な要素となってくる」と指摘している。

(V)

以上、本書の内容を簡単に紹介したが、著者の主張は肯けるものばかりである。とくに「アメリカには、実証的根拠のない空虚な理論を経済政策や社会政策に採用したために、あたら公共財(税)を無駄に費やしてきたという、苦い経験がある。その反省から、これからは実証的裏付けのない、理論だけの論文はもうやめにしよう、大学院レベルでは特にそうすべきだ、ということになっている。論文を書くにはまず『データ』がなくては話にならない」ということが日本の大学(院)でもいわれていることから、大学院生の安易なデータ収集と不十分な検証がゴミを生み出しているとい

う指摘には納得させられた。

また、大学院生の中には統計学も知らずに統計解析ソフトによって多変量解析を行っている者もいるが、彼らには「トピック立案から仮説作成，リサーチ・デザインに至るまで，すべてのプロセスを正しく把握できていない者が多変量解析を扱うのは，かえって危険でもある」という著者の指摘を知ってもらいたい。

このような問題は大学院生の問題に限ったことではなく，「若い頃に受けた教育カリキュラムに問題があったため，無知なまま学者になってしまった」大学の先生が安易なアンケート調査に基づいて書いた論文を昇進審査のために提出し，同じく「無知なまま学者になってしまった」先生がその論文を審査しているという話もよく聞く。

大学院生を含め，経済学を学ぶ学生諸君には少なくとも学位論文や卒業論文を書く前に是非とも社会調査に関する入門書として本書を読んでいただきたいし，「若い頃に受けた教育カリキュラムに問題があったため，無知なまま学者になってしまった」大学の先生にも読んでいただきたい。

筆者も学生時代には社会調査論を学べず，「無知なまま学者になってしまった」一人であり，また「自説の正しさを信じるあまり，ある方法論的なプロセスを（知らずに）省略したり，他の重要な要素を抜かしてしまうことから起こる間違い」を犯していた一人であった。

(文藝新書，2000年，222頁，690円＋税)